

—◆—演奏会情報—◆—

2012. 10. 24 (水) 大阪交響楽団第 170 回定期演奏会

(会 場) 大阪 ザ・シンフォニーホール

(曲 目) [1] W・A・モーツァルト 交響曲第 40 番
[2] 佐村河内 守 交響曲第 1 番「HIROSHIMA」

(指 揮) 大友 直人

(管弦楽) 大阪交響楽団

—◆—鑑賞記—◆—

[0] はじめに

大阪交響楽団の定期演奏会に指揮者・大友直人氏が登場するのは、2 度目。

わたしが、初めて足を運んだクラシック音楽の演奏会の指揮者が、大友氏だった。そんなこともあり、大友氏への思いは熱い。

そんな大友氏が、わたしの大好きな大阪交響楽団の定期演奏会を客演するという夢のような演奏会と言っても過言ではない。それゆえ、今期のプログラムの中でも楽しみにしていた演奏会の一つだった。

「希望の光」と題された今宵の演奏会、私的な大友氏への思いとともに、その様子を記したい。その前に少し、大友氏の経歴について、パンフレットから抜粋しておこう。

【大友直人プロフィール】

桐朋学園大学を卒業。指揮を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、岡部守弘各氏に師事。桐朋学園大学在学中から NHK 交響楽団の指揮研究員となり、22 歳で楽団推薦により NHK 交響楽団を指揮してデビュー。現在、東京交響楽団常任指揮者、京都市交響楽団桂冠指揮者、琉球交響楽団ミュージックアドバイザー。また、2004 年から 8 年間にわたり、東京文化会館の初代音楽監督を務めた。2013 年 4 月から群馬交響楽団の音楽監督に就任することが決まっている。

華々しいデビューを飾り、国内での活躍を主に、研鑽を積んでこられた大友氏。音楽的な造詣の深さはさることながら、人柄の良い演奏というか、気品のある演奏が売りではないだろうか。故朝比奈隆氏を彷彿とさせるその様は、日本男児としての心得を持ち合わせているような気がしてならない。

残念ながら、あまり海外での輝かしい功績はないが、国内のクラシック音楽の向上に対する寄与は、大友氏を抜きに語れないとわたしは確信している。

これは、あくまで個人的な思いだが、大友氏は演奏家というより教育者に向いているのではないかと。指揮を見て分かるが、とても正確なことに驚く。そして、基本に忠実な指揮で、決して派手さはないが、確実であるため、安定した演奏を楽しむことができる。この安定感は、教育向きだとわたしは思っている。彼のもとで学び、是非、海外へと羽ばたいてほしい。桐朋学園の教えを受けた彼だからこそ、またそれが可能だと信じている。

さて、前置きが長くなったが、演奏の方へ話を進めることとしよう。

[1] W・A・モーツァルト 交響曲第40番

耳にしたことの多い曲だろうと思うが、とても情熱的なものを感じる。意外とモーツァルトって、こういう性格だったのかも・・・。

ただ、良く耳にする曲ほど、演奏するのは難しいもので、乱れや微妙な音の違いが良く分かるため、どうしても物足りなさを感じてしまいます。今回も、多分にもれず、出だしから乱れが目立った。後半のプログラムに重点があるためか、どうも全ての楽章において、不満が残る演奏だった。とくに、第2楽章は、もっと情緒豊かな響きが欲しいところだ。そして、その反動として躍動的な第3楽章へ繋がり、フィナーレとなる終楽章を迎えるのだが、勢いでごまかした感じがして、いささか大友氏らしさに欠け、残念だった。

[2] 佐村河内 守 交響曲第1番「HIROSHIMA」

本日のメイン。この曲だけでも良かったのではないかと、わたしは思う。それもそのはず、80分を超える大作で、初演ですら、第1楽章と第3楽章だけだったのだから・・・。

正直、現代曲ということもあり、あまり期待はしていなかった。しかし、その思いは、一瞬にして払拭されることとなる。

多くの現代曲は、これまでの作曲家がおよその演奏法なり、音階なり、メロディーといったものはやりつくしているのもので、奇をてらったものとなるが、この交響曲は違う。正攻法とまでは言い難いものの、それなりの体をなしている。そこに驚きを隠せない。全てがストレートなのだ。それは、この作曲家、佐村河内守氏の生い立ちを知れば分かる。簡単にプロフィールを紹介しておこう。

【佐村河内守プロフィール】

1963年、被爆者を両親として広島に生まれる。4歳の頃から母にピアノの英才教育を受け、その後、作曲家を志望。中学高校と独学で音楽法を学ぶ。17歳のとき、原因不明の偏頭痛や聴覚障害を発症し、その後、聴力を失う。そのような中、絶対音感を頼りに作曲活動に取り組んできた。

広島への思い、平和への思い、そういったものが作品に込められているんだろうということは想像できるが、それ以上に、自分への苦しみやいら立ち、相対して喜びや楽しみといった人が持ちうる感情の全てがつまり、聴く人に問いかけている。そんな作品に仕上がっているように思えてならなかった。

奥が深いというより、むしろ分かりやすい。

わたしは、そう感じた。それは、人の心そのものであり、包み隠すことのない表現だったからではないだろうか。佐村河内氏が、この曲に込めたものは、ストレートに人の心に突き刺さり、色んなことを教えてくれているように思う。曲の長さ、くどさ、そういったものも、また人間らしさであり、一人の人の生涯を描いているともいえるだろう。

なかなか、聴く機会はないかもしれないこの交響曲を、ナマでしかも、全曲通して聴くことができ、素晴らしい出会いを与えてくれたことに感謝したい。

[3] おわりに—余談—

今回の演奏会は、佐村河内氏の交響曲を演奏するということもあり、著名人からのお花の贈り物や、来場も目立った。わたしのすぐ後ろの席にも、ラサール石井氏が居た。

それはそうと、大友氏との出会いが、クラシック音楽の演奏会の出会い（始まり）でもあり、また今回、このような交響曲を聴く機会となり、クラシック音楽の面白さを発見することにもなった。大友氏は、わたしにとって何かのタイミングで、良い刺激を与えてくれる指揮者であり、音楽家であることは間違いないと思う。これからの活躍を期待したい。